

遍路文化 世界へ発信

同村は、全行程約740キロの巡礼路のおよそ4分の3の地点に位置する人口約930人の小さな村だが、巡礼シーズンになると大勢の観光客でにぎわうという。

世界遺産の先進地から取り組みを学ぼうと、定期的にスペイン巡礼路を歩いているNPO「遍路とおもてなしのネットワーク」(理事長・梅原利之JR四国相談役)に昨年夏、交流相手を探していた村から打診があり、話がまとまった。

村での調印式には、同ネットワークの松岡敬文事務局長(59)と四国の第二地銀の従業員組合で組織するループ88四国の森徹理事長(34)らが、菅笠や納経帳などの遍路

スペイン巡礼路の村と宇多津町など交流

NPOが橋渡し

グッズや四国の自然を紹介するDVDを携えて出席。谷川宇多津町長らの親書をアルホンソ・アリアス・バルボア村長に手渡し、交流を記念して四国遍路の道しるべになっている石柱を建立した。

同村長によると、将来はブラジルやインドの巡礼路の自治体とも交流し、各地の文化を紹介する博物館を造りたい意向で、遍路グッズは早速、60平方メートルほどの展示室に並べられた。

宇多津、愛南町でもスペイン巡礼路を紹介する展示コーナーを遍路道沿

いに開設する予定。また、年間約3千人と、いまの橋渡ししたNPOでも、歩き遍路と同規模だが、現地のNPOとホームページを通じて情報発信し、交流が深まることで、スペインを訪れる世界の人に

松岡事務局長は「世界『次は、ぜひ四国へ』と遺産に登録される前、スアピールできれば」と話。スペイン巡礼路を歩く人はしている。



スペイン・モリナセカ村に建立された遍路文化を伝える石柱。右からバルボア村長、森理事長、松岡事務局長